

ドキュメンタリー映画

上映時間 73分(本編 53分+20分)

核の傷

肥田舜太郎医師と内部被曝



被爆者治療と核廃絶運動に献身してきた

肥田医師が内部被曝の実態を訴える

監督・撮影 マーク・ブレイシヤン(フランス) 日本版ナレーション 築谷将太



同時上映

『3.11以降を生きる：肥田舜太郎医師講演より』

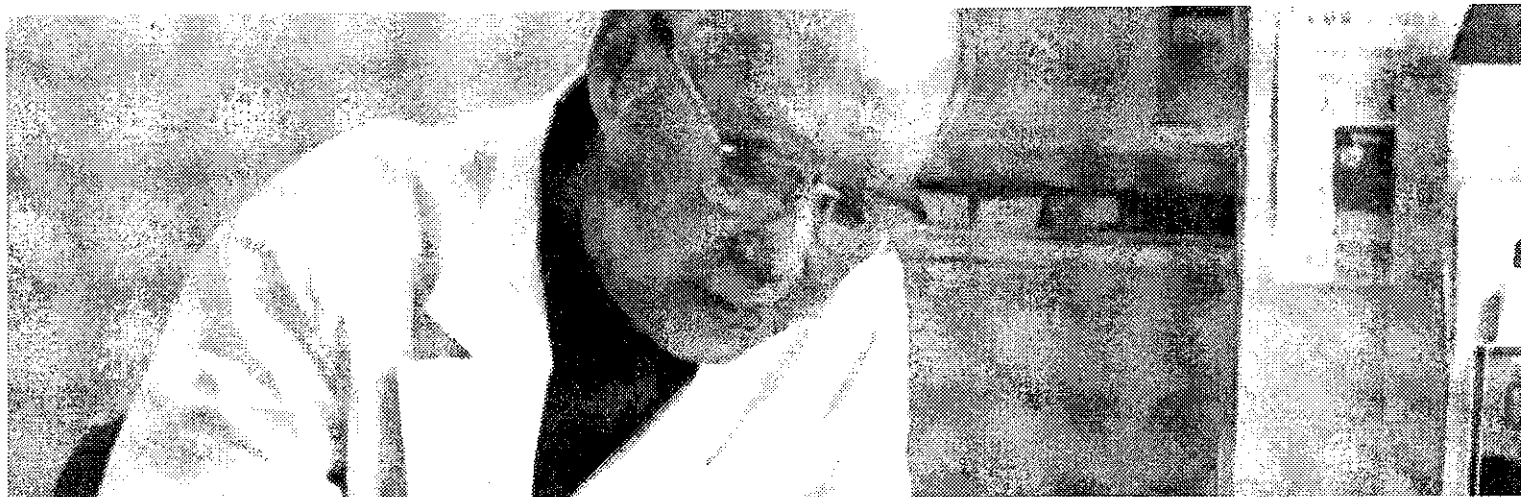
福島原発事故から一年、放射性物質は列島の隅々まで飛散し、すでに安全な場所はない日本でどう生き抜くかを説く肥田医師の講演エッセンスを収録。「放射能に立ち向かうには『生きるんだ』という意志を持って一生懸命生きなければならないのです。自分自身が自分の命の主人公にもなって、先祖から引き継いでいる免疫の力を守り、ひたすら健康に生きるよう意識し努力することしかないと思っています」(2012年アップリンク製作・20分)

日時 2012年7月7日(土) ①10:30②13:30③15:30④18:00

場所 せんだいメディアテーク7F スタジオシアター

参加費 前売券 一般 1,000円(当日 1,200円)
学生 500円(// 700円) 高校生まで無料
前売り券取り扱い/藤崎プレイガイド・メディアテーク1F Museum Shop 6

主催 「テロにも戦争にもNOを!」の会 連絡先090-7936-3437須藤・022-248-2866春日



内部被曝の実態を訴え続ける肥田舜太郎被曝医師

映画の中で肥田医師は、直接被曝していない人々も、ただ体がだるいといった原因不明の症状を発症していくことの疑問を、戦後30年経った1970年代にやっと理解できるようになったと語る。その理解の元となるのは、アメリカの原発製造会社ウェスティングハウス社に勤めていたスターングラス博士が低線量被曝についての実態を研究した著書『低レベル放射能』である。

スターングラス博士は、原発からは平常の運転時でさえ放射能が漏れていて、その地域の癌の発症率が高いというデータを挙げており、原爆投下後の調査でも低線量被曝の影響をアメリカは意図的に隠してきたと憤る。

「どれくらいの放射線が人体にとって限界なのか、広島、長崎での調査を元に、アメリカのABCC(原爆障害調査委員会)が基準を決めている。ほんの少し体内に入った放射線の粒がどれだけ人体に影響を与えるのか、科学を名乗った最も権威のある集団が嘘をついているのです」

——(肥田舜太郎)

なぜ日本政府は米国政府と結託して嘘をついたのか

なぜ日本政府は、アメリカ政府と結託して、原爆による死亡者の数を隠そうとしたのでしょうか？日本にとって、原爆は忘れ去りたい過去であり、敗戦の屈辱を思い出したくなかったからかもしれません。そしてなにより、被爆者の認定は、国の賠償責任にもつながる問題だったからでしょう。1945年に原爆が落とされてから、数千回もの核実験が世界で繰り返されてきました。そして、何千発もの核弾頭が、いつ爆発するか分からずに眠っています。何百という原子力発電所稼働し、放射能を含んだゴミが、毎日、生まれています。(『核の傷』ナレーション)

肥田舜太郎さんプロフィール

1917年広島市生まれ。
1944年陸軍軍医学校を卒業、軍医少尉として広島陸軍病院に赴任。
1945年8月6日、原爆に被曝、直後より被爆者救援・治療にあたり、戦後67年間、被爆者治療と核廃絶運動に献身している。2009年に医療活動から引退後も、執筆、翻訳、講演活動を続け、2011年の福島原発事故後に急増した取材・講演依頼にも応え続けている。

著書 『ヒロシマ・ナガサキを世界へ—被爆医師の反核語り部世界行脚』(あけび書房、1991年) 『広島が消えた日—被爆軍医の証言』(初版・日中出版、1982年/増補新版・影書房2010年) 『ヒロシマを生きのびて—被爆医師の戦後史』(あけび書房、2004年) 『内部被曝の脅威』(共著、ちくま新書、2005年) 『内部被曝』(扶桑社新書、2012年)・訳書多数

私たちの会は

2001年9月11日のニューヨークでのテロ事件のあと、「誰の命も大切にされなければならない。一人ひとりの平和への思いを小さくても声に出していこう!」と集まり活動を続けてきました。

福島第一原発の事故がもたらした悲惨な現実、戦争によっていのちや人間としての尊厳を奪われるのにも等しいと感じます。将来に生きる人達のために、今、私たちは何を引き受けなければならないのでしょうか。一緒に考えていきたいと思ひます。

「テロにも戦争にもNOを!」の会